

# F×A = ?<sup>1</sup>

法学部3回生 長谷 悠太

## 1. はじめに

日本のマンガ史を語るうえで欠かせない二人のマンガ家、藤子・F・不二雄と藤子不二雄<sup>④</sup>。知らない方もいるかもしれないが、この二人はかつて藤子不二雄という一つのペンネームで作品を発表していた。しかし、ペンネームは共通でも、実際は作品を描き分けていたのである。例えばF先生は『ドラえもん』『パーマン』『エスパー魔美』『キテレツ大百科』など、<sup>④</sup>先生は『忍者ハットリくん』『怪物くん』『笑ゥせえるすまん』『プロゴルファー猿』など、という具合に。作者紹介やイベントなどでは二人でも本当のところは…ということだったのである（波に乗るまでアイデアの相談などはしていたであろうが）。そうは言ってもやはり初期は二人協力して生み出していた作品があるのであり、本稿ではF先生だけ、あるいは<sup>④</sup>先生だけというのではなく、二人だからこそ、という点に着目して、藤子不二雄の歴史や共著作品について紹介したいと思う。

## 2. 藤子不二雄の昔と今

藤子・F・不二雄（本名：藤本弘）は1933年12月1日に富山県高岡市に、藤子不二雄<sup>④</sup>（本名：安孫子素雄）は1934年3月10日富山県氷見市でそれぞれ生まれる。小学5年生のとき、安孫子氏が戦争疎開で高岡に移り住んだ際に知り合い、手塚治虫の漫画などの刺激を受けながら二人で漫画を執筆して雑誌に投稿を繰り返す。一時は民間企業に勤めるもプロの漫画家を目指して20歳の時に上京、後にトキワ荘に転居。寺田ヒロオ氏などと新漫画党（第1次・第2次がある）を結成して、児童漫画家の中でも志向が近い若者同士で切磋琢磨しあう。上京間もなくはたまた読み切り作品を依頼されるほどであったが、その才能は早くから出版社・漫画家仲間に認められるものであった。ただ、依頼されるとついつい引き受けてしまったことから1955年正月の帰省で原稿を大量に落とす苦い経験もしている<sup>2</sup>。1963年、鈴木伸一氏ら漫画家有志たちとスタジオ・ゼロ<sup>3</sup>を設立、アニメ製作にも関わるようになる。ただ、それぞれ連載を抱えて多忙で大赤字、雑誌部を作りそこでの収益を補填することで経営する策を選

<sup>1</sup>ふと思ひ浮かんだエスパー魔美の短編『うそ×うそ=?』から。

<sup>2</sup>連載5本中3本、読切り3本中2本、そして64頁の別冊フロクと、実に9本中6本を落とすという惨憺たる結果だったとのこと。

<sup>3</sup>6人で設立し、内5人は役員。社長を2年任期とし、あみだくじの順番で務めていたという。F氏は3番目、<sup>④</sup>氏は最後の5番目（ただし7年目で解散したため<sup>④</sup>氏は就かず）。一時期は100人もの社員を抱えた。

ぶ。そんな中生まれた 1964 年の『オバケの Q 太郎』で藤子不二雄作品は本格的にヒットするようになる（詳細は後述）。その後、F 氏の『ドラえもん』（1969 年）に代表される、児童漫画に分類されるだろう作品を発表する一方で、大人向けの作品も数多く発表した。漫画だけにとどまらずアニメなど様々な媒体でも取り上げられ、その人気はより一層増すこととなる。実質としては作品を描き分けていたことや F 氏の病気などを理由として、1987 年二人で一人の藤子不二雄を解消し、二人はそれぞれ分かれて作品を描くこととなる（解散後しばらく、F 氏のペンネームは藤子不二雄<sup>®</sup>）。F 氏は長年の闘病生活の果て、1996 年 9 月 23 日永眠する、享年 62 歳であった。一方の<sup>Ⓐ</sup>氏は現在も精力的に活動されており、『愛…しりそめし頃に…』『PAR マンの情熱的な日々』の 2 作を連載中、2012 年 8 月には『78 歳いまだまんが道を…』を出版している。

ドラえもん生誕 100 年前となった今日でもマンガ以外のメディアも含めて藤子作品の人気は色あせない。アニメ『ドラえもん』は現在第 2 作第 2 期が 2005 年から放送中である。2009 年 7 月から藤子・F・不二雄大全集が刊行、2012 年 8 月には『ユリシーズ』を除く収録予定作品の全てが初単行本化となる驚愕のラインナップの第 4 期刊行決定が発表された。また、2011 年 9 月 3 日に川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムがオープンし盛況であるほか、翌年（今年）の同日はドラえもん生誕 100 年前とミュージアム 1 周年が重なり、ドラえもんに川崎市特別住民票（下写真）が交付されるなど藤子熱はとどまるどころを知らないという感がある。また、<sup>Ⓐ</sup>作品である『忍者ハットリくん』は今年インドで新作アニメの制作が行われ、日本に逆輸入される予定であるという。新聞での 1 コーナーや F-Train、F-Train II などをはじめ様々な藤子キャラクターラッピング列車が運行される鉄道界など、各界の取組みは嬉しい限りである。



### 3. 作品紹介

共著作品として代表的なものを、そのあらすじと筆者の解説めいた呟きを交えて以下に紹介していく。

#### ・天使の玉ちゃん（1951年）

【あらすじ】玉ちゃんは天国から下界に落ちた時に羽をなくしてしまった。それを捜しに行くのだが…。

藤子不二雄としてデビューを果たしたのが今作（名義としては、あびこもお ふじもとひろし）。4コママンガで毎日小学生新聞の大阪版に掲載された。当時高校生の二人は新聞社に原稿を送ってはいたのだが、採用の通知はなくあきらめていた。そこにある日突然原稿料が送られてきて、採用されていたことを知る。元々10話分の原稿を送っており、連載ならばとさらに10話分を送ったが、結局6回掲載されただけで突如打ち切られた。藤子・F・不二雄大全集ではついに第3期の最終配本として2012（平成24）年9月に出版された。

#### ・UTOPIA 最後の世界大戦（1953年）



（左）小学館クリエイティブ刊行の完全復刻版表紙（右）藤子・F・不二雄大全集第3期12回配本の表紙。記念すべき100冊目でもある。

【あらすじ】第3次世界大戦でA国軍との戦いでS連邦が使った氷素爆弾により凍りついた地球。シェルターに閉じ込められ100年後に蘇った少年が見たのは、氷素爆弾の被害から立ち直り、科学文明の発達したユートピアとして再建された地球だった。

藤子不二雄の最初で最後の描き下ろし単行本である。ただし名義は足塚不二雄。この足塚不二雄の「足塚」とは、手塚治虫には及ばなくともせめて足元には追いつきたいとの願いからとったペンネームである。本作は、高岡から上京し複数の出版社に持ち込んだもののなかなか採用されないところを手塚治虫に紹介され、鶴書房から 1953 年 8 月 10 日発行で刊行された。ちなみに、次の作品は同年発行の「おもしろブック夏休み増刊号」に掲載された『旋風都市』だが、それは藤子不二雄名義となっている。

当時にして定価 130 円という高価な書物で、貸本として読まれていたことが影響して、現存するものはかなり少なく、今の値段では 100 万円以上の値が付けられるほどのものであったが、2011 年 8 月松本零士氏所蔵の原本を元に小学館クリエイティブより完全復刻版が発売されることとなり、時代性を感じられる形で、多くの人の目に触れる機会が増すこととなった。藤子・F・不二雄大全集では前述の『天使の玉ちゃん』と同様、第 3 期の最終配本として 2012 年 9 月に刊行された。

#### ・海の王子（1959 年～1965 年）

【あらすじ】海底にあるカイン王国の「海の王子」は妹チマと共にはやぶさ号を操縦し、世界の平和を脅かす悪と戦う。はやぶさ号の開発者である明晰な頭脳と勇敢さを持つチエノ博士やハナさんのキャラクターには惹かれるところがある。

週刊少年誌「少年サンデー」「少年マガジン」が創刊したのが 1959（昭和 34）年のこと。その「少年サンデー」の創刊号を飾ったのが『海の王子』である。最初の数回は高垣葵氏が原作を担当。藤子作品としては珍しく中編・長編作品が多い。余談だが中長編と言えば『モジャ公』が有名であろうか。丸 2 年にわたって連載された後も読み切り作品を多く掲載し、後に学年誌でも連載されることとなった。この安定的な人気が評価されたのか、少年サンデーではこの後『オバケの Q 太郎』や『パーマン』など数々の藤子作品が発表されることになる。『海の王子』は長らく絶版だったことから、大全集では第 1 期に次項の『オバケの Q 太郎』と合わせて目玉作品であった。特に 3 巻は収録作品全てが初の単行本化となった。

#### ・オバケの Q 太郎（1964 年～1967 年）

【あらすじ】正ちゃんの上に突然現れたオバケの Q 太郎。オバケのくせに満足に化けられないし、それどころか大食らいでのんびり屋、でも友達思いの憎めないやつ。そんな Q ちゃんを中心にして起こるドタバタな毎日を描く日常ギャグ。

2 章で軽く紹介したが、『オバ Q』はスタジオ・ゼロが危機に陥り、雑誌部で生みだ

した利益で動画部を補填することになった折に少年サンデーから藤子に來た依頼を雑誌部に回して作られた作品なのである。そのため、『オバQ』は藤子両氏だけの手によるものではない。オバケやコマ割りはF氏、正ちゃんや伸一兄さんはA氏、よっちゃんやゴジラは石ノ森章太郎（当時：石森）氏が担当した<sup>4</sup>。当初は7回の予定が13回に伸びたものの、読者の反響が乏しく一旦は終了した。しかし、その後ファンからの手紙が殺到して連載再開と相成った。アニメ第1話は30%超えを記録するなどそのオバQブームはすごいものであったらしい。なお、第1話のストーリーを構想する上で、藤子氏は自宅から事務所まで小田急で通う中で思いついたとされるが、おおよその顛末はF氏の短編『スタジオ・ボロ物語』から推察することができる。

また、1971～1973年に描かれた『新オバケのQ太郎』はF氏単独による作品である。こちらでは「バケラッタ！」でおなじみの、Q太郎の弟O次郎が登場し、新たな面白さを引き出している。余談であるが、個人的には新版の方のギャグの方が好みである。

#### ・チンタラ神ちゃん（1966年）

【あらすじ】ジローが作ったほら穴の秘密基地に神様トリオが住み着いた。神様たちは信心深い人が減り不景気だと、「チンタラ教」にジローを入信させる。信者である以上はジローに幸運を与えようとするけれど…。

児童漫画で宗教をテーマにするのは例が少ないと思われる。漫画としては難解だからというのもあるのだろうが、主読者である子供への影響を考える側面もあるのかもしれない。本作は半ば強引に小学生ジローが入信させられ、迷惑を大いに被る(笑)わけであるが、作品に対する前述のような不安要素は感じさせないのがさすがである。

『クーパー教』など、今から思えば先生方の健康状態が心配になるような作品も残しているのは興味深い。大全集では第3期刊行。

#### ・仙べえ（1971年～1972年）

【あらすじ】マイホームで平穩に暮らす峯野家のところに、昔仙人になると家を出たひいじいさんの兄である「仙べえ」が転がり込んできた。修行をつんだ(?) 甲斐あってか仙術を使えるも、ろくなことにならなくて…。

---

<sup>4</sup> 藤子氏以外の漫画家も積極的にペン入れしている点で興味深い。鉄腕アトム『ミドロ沼の怪人』のアニメ制作では、鈴木・藤子・石森・つのだと4(5)人の漫画家の個性が出たアトムが描かれた。これがスタジオ・ゼロの全重役がアニメーターとして描いた最初で最後の作品であった。漫画家は漫画家、アニメーターはアニメーターということなのだろう。

『仙べえ』は、藤子不二雄が小学生の日常生活をテーマに描いた作品としては異色と言えらると思う。というのも峯野家は極めて羽振りがいいのだ。そして一家を非日常へと導く主人公がとんでもないドタバタを引き起こすのである。スネ夫の家にエモドラ（『のび太の創世日記』）がやってくる話、とでも例えればわかりやすいかもしれない。実際に読むと、『ドラえもん』『忍者ハットリくん』『チンプイ』など他の代表作と比べた時に若干の違和感を感じるのではなかろうか。ちなみに、『オバQ』のQちゃんもドタバタの渦の中心にいるが、正ちゃん一家が平均的な家庭である点で、またドロパなど他のオバケも含めたオバケ“たち”に主眼が向けられている点で、それとも違うものと言えらるだろう。大全集では第2期刊行。

他の共著作品を合わせると以下の表のようになる。

年	作品
1951年	<b>天使の玉ちゃん</b>
1952年	西部のどこかで、三人きょうだいとにんげん砲弾
1953年	四万年漂流、 <b>UTOPIA 最後の世界大戦</b> 、旋風都市、暴風の奇術
1954年	宇宙鉱脈、一万四方の冒険、海拔六千米の恐怖、お化け退治、世界メイ作全集、史劇絵物語 十字架上の英雄
1955年	ねらわれた地球、光にあたれ陽にあたれ
1956年	白さぎ城物語
1957年	タップタップのぼうけん
1958年	きょぞうジャンバ、ノアはかせのロケット
1959年	<b>海の王子</b>
1960年	かせいのたまちゃん
1961年	星の子ガン、銀星少年
1962年	正義の味方
1964年	<b>オバケのQ太郎</b>
1965年	名犬タンタン、ベレーのしんちゃん、ウルトラB そのとき三発！、ジロキチ
1966年	世界めい作まんが全集
1967年	<b>チンタラ神ちゃん</b>
1971年	<b>仙べえ</b>
1984年	のらくろよ永遠に

※『Fの森の歩き方』著作リストを参考に作成。各誌で連載時期が異なるものなどはすべて第1話が描かれた年のみ記載。なお、太字イタリック体は本稿で紹介した作品。

大全集が刊行されるまで、近年読むためには古書店や個人の蔵書、あるいは国会図書館などに頼る以外方法がなかった作品がずらり、という印象を受ける。以上のリストはあくまでプロとしての作品であり、15歳前後に描かれた同人漫画誌『RING』や肉筆回覧誌『少太陽』などでも共著は見られることだらう。ちなみに『ウルトラB』はA氏の作品であるが、そのプロットとされる『ウルトラB そのとき三発！』は共著

である。

藤子作品としてよく知られる作品は共著ではなく一人で描かれていたものであるということが表から見てとれる。特に1964年の『オバQ』のヒット以降は共著作品が格段に少なくなっており、これが藤子不二雄の漫画家人生にとって一つの大きな契機となったことも明らかと言えるのではなかろうか。

#### 4. まとめ

今回紹介した作品は、作品名こそ知れど読んだことがないか、あるいは少年少女期に読んで以来読む機会がなかったという方がほとんどではないかと思われる。こういうことに至った背景として、藤子不二雄が解散しF氏・A氏それぞれが会社を持ったことで、著作権が複雑になったため共著作品の出版が困難になったためではないかと考えられている。多くの名作品を生みだしてきた藤子不二雄氏の漫画が一部とは言っても、触れるのが難しかった時期があったことは残念である。しかし、これまで絶版あるいは単行本化さえされずに、読むことが容易でなかった作品たちを、2009年の大全集刊行をきっかけとして、手元でいつでも気軽に読むことが可能になった。我々読者は「気軽に」読めるのであるが、編集部ではやはり並々ならぬ苦勞があったようだ。「いつ、どの雑誌に、どのような漫画が描かれた」というデータがそもそも完全ではなく、原画がないものは印刷物の複写、その複写も国会図書館から個人の蔵書まで検索し…。その結果が今あるのである。そんな編集さんの努力に応えて我々は日の目を見た作品をどんどん読もう。そして藤子作品の魅力に改めてどっぷりと浸かろう！大全集第4期刊行が決定されたことに心から感謝して、この辺りで筆を置くことにする。最後まで駄文をお読みくださりありがとうございました。

#### 5. 参考文献

藤子不二雄A、藤子・F・不二雄「藤子不二雄A 藤子・F・不二雄 二人で少年漫画ばかり描いてきた」、2010年、日本図書センター

藤子・F・不二雄大全集（第1期～第3期）、小学館、2009年～2012年

Fの森の歩き方（藤子・F・不二雄大全集 別巻）、小学館、2010年7月

完全保存版 大人のための藤子・F・不二雄（Pen+[ペン10月1日号別冊]）、阪急コミュニケーションズ、2012年